

順天堂大学がICT制御に基づく 在宅医療開発講座を開設

～ICTを駆使した未来のパーキンソン病ハウスを目指して～

大山 彦光

高梨 雅史

服部 信孝

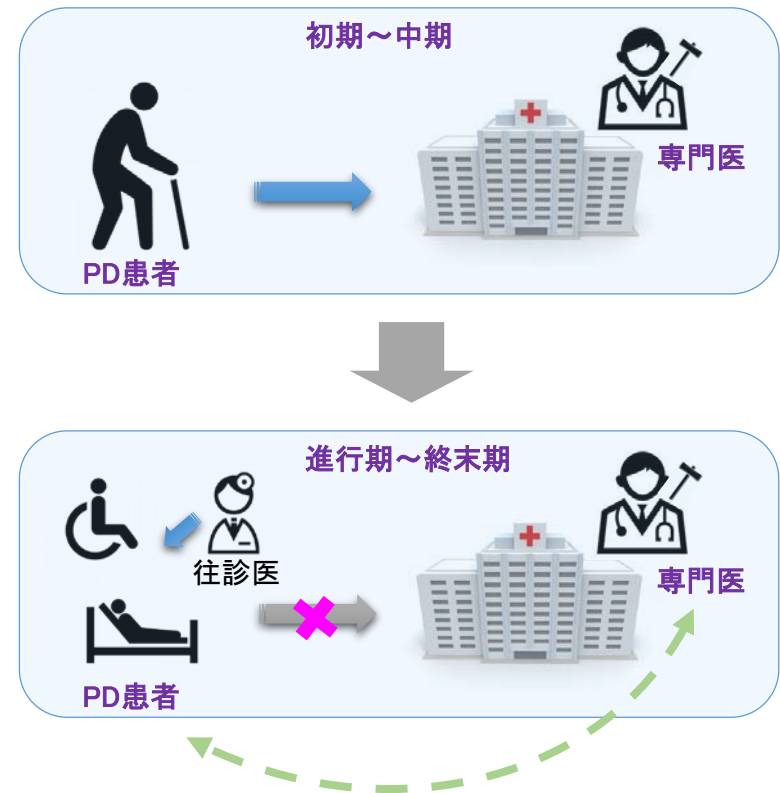
順天堂大学大学院医学研究科 神経学

背景

- すでに高齢社会に突入した本邦において、加齢とともに急増するパーキンソン病(PD)患者のターミナルケアの充実喫緊の課題となっている。

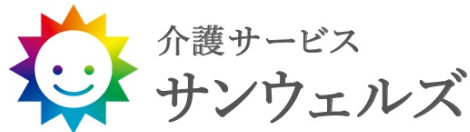
- 進行期の患者は、遠方への通院が困難になると、在宅または施設において往診を受けていたが、脳神経内科専門医の診療を受けることは困難となり、日常生活動作(ADL)および生活の質(QOL)の著しい低下をきたしてしまう。
- 一方、大学病院の役割の変遷とともに、終末期のPD患者が長期入院することが不可能となり、専門医と患者の関係が希薄になり、剖検率の低下にもつながっている。

進行期～終末期の患者と専門医をつなぐ仕組みが必要である！

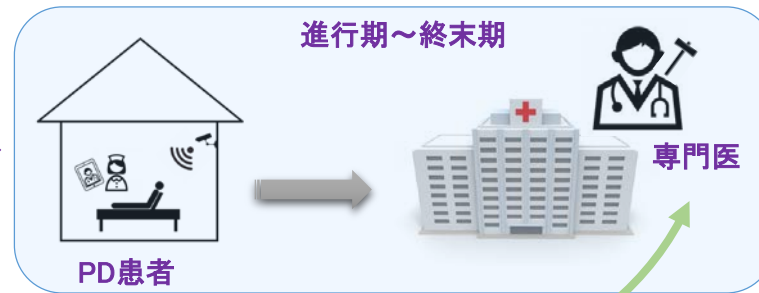
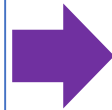


講座の目的・概要

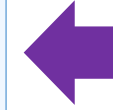
- PDの在宅分野における様々な課題に対して、情報通信技術(ICT)を駆使したPDに特化した介護施設において、マルチセンサー遠隔モニタリングによるデータ収集・解析を行うことによりホームアダプテーションを行い、患者のQOLを改善する研究を行う、産学連携による共同研究講座を2019年10月より開設した。



専門医が監修する、本邦初のPD専門ホーム、“PDハウス”の運営を開始し、終末期においても専門医が介入し続ける介護環境をすでに実現



世界有数のPD治療センターとして保有する高度な知見



- 生活の場でのマルチセンサー遠隔モニタリングによるリアルタイムのデータ収集・解析
- 進行期～終末期患者の様々な問題を抽出
- 住居のハード・ソフト面における介入でQOLを改善するホームアダプテーションの研究・開発

講座の特徴

- 産学連携により、大学病院だけでは追跡することができなかった、進行期～終末期の患者の「リアルワールド」データを、ICTモニタリングにより長期間、連続的に蓄積できる。
- PD患者のADLおよびQOLを高める有効な介護施設および住居のハードおよびソフト面でのホームアダプテーションのイノベーションにつながることを期待される。
- WEB会議システムを用いた介護施設スタッフの専門教育の推進と効果検証を行い、在宅介護領域におけるPDケアに特化したコメディカル人材の育成が期待できる。
- 専門医が終末期まで介入し続けるため、患者および家族と深い信頼関係を築きやすく、剖検事例の増加が期待でき、将来的に、本講座で得られたデータと病理所見の統合により、質の高い研究につながることを期待できる。